

復帰や反戦運動 歴史写真を寄贈

沖教組保管 1960—2000年代の数万点

【読谷】県教職員組合(沖教組)は、保管していた本土復帰前の1960年代から2000年代までに撮影された定期大会や県民総決起大会などの様子を収めた写真を3月24日、村に寄贈した。写真は膨大で数は不明。紙焼き写真の一部をデジタルスキャンしたのは1万6676点あり、沖教組は全体で「5万余はあるのでは」としている。



読谷村へ 屋良元知事の縁

前身の「沖縄教職員会」会長を務めた元県知事の故・屋良朝苗氏が村出身という縁で、沖教組は13年、村に写真や文書など約8万点の資料を寄贈していた。村はデジタルアーカイブ化に取り組み、一部を「沖縄戦後教育史・復帰関連資料」としてウェブで公開している。

今回、追加で寄贈された写真は、沖教組が新会館への移転に向けた作業中に発見されたものという。

写真には、1971年に開いた沖教組の結成大会など定期大会の様子を撮影したものや、69年に全沖縄軍労働組合(全軍労)が実施した24時間ストライキで、ピケ隊を激励していた社大党の安里積千代委員長に銃剣を向ける米兵などが確認された。

全沖縄軍労働組合(全軍労)が実施したストライキで、ピケ隊を激励していた社大党の安里積千代委員長(左)に銃剣を向ける米兵(1969年、読谷村提供)



県教職員組合(沖教組)の結成大会(1971年、読谷村提供)

た。

山本隆司元委員長は「沖教組は戦後の教育の復興に尽力し、復帰運動や反戦運動にも主体で関わってきた。写真は県民の財産として後世に残したいとの思いがあり、村が全面的に担ってくれたことはありがたい」と村に感謝した。

村のデジタルアーカイブ化プロジェクトで代表を務めた明治大学研究・知財戦略機構研究推進員の村岡敬明さんは「寄贈された写真資料は本土復帰までの戦後の沖縄史をひもどく貴重な記録だ」と評価した。

村も「写真は復帰前後の当時の世相を表す貴重なものだ」と話し、一般公開に向けて準備を進めていきたいとした。